

乳がん高度検診・治療センター

NEW-す No.114

～その1～

化学療法（抗がん剤治療）の心臓への影響について

一部の乳がん治療薬では心臓にも注意を！

がん化学療法（抗がん剤治療）の副作用というと、脱毛、吐き気や嘔吐、血液検査での異常、などを思い浮かべられる方が多いでしょう。ただ、それら以外にも、化学療法の種類によっては、さまざまな臓器にダメージを来すことがあります。案外知られていないこととして、乳がんなどで標準的に用いられる化学療法（分子標的治療を含む）の一部には、治療中あるいは治療後に、心臓への副作用が出るものがあります。心疾患を発症することなくがん治療が完遂できることを目的として、本年（2023年）、日本臨床腫瘍学会、日本腫瘍循環器学会の共同編集として「Onco-cardiology* ガイドライン」が刊行されました。そこで、この機会に乳がん治療分野で注意すべき心疾患やその予防について解説します。

*Onco-cardiology：onco（腫瘍）+cardiology（循環器学）、で腫瘍循環器学と邦訳され、がん専門医と循環器専門医が協議して上記の指針が出された。

心毒性をきたしうる乳がん治療薬

化学療法による治療で問題となるのは心臓の筋肉、つまり心筋への影響です。心臓自体筋肉で動いており、表1に示した化学療法では心筋の機能を低下させ、ときには心不全を起こすことがあります。

表1

心臓への影響が起こりうる乳がん治療薬

	治療薬（一般名）
アンスラサイクリン系抗がん剤	アドリアシン（ドキシソルピシン）
	ファルモルピシン（エビルピシン）
分子標的治療薬	ハーセプチン（トラスツズマブ）
	パージェタ（ヘルツズマブ）
	カドサイラ（トラスツズマブ エムタンシン）**
	エンハーツ（トラスツズマブ デルクステカン）**

**厳密には分子標的治療薬に抗がん剤を結合させた抗体薬物複合体（ADC）。



乳がん高度検診・治療センター

NEW-す No.114

～その2～

化学療法（抗がん剤治療）の心臓への影響について

一部の乳がん治療薬では心臓にも注意を！

表1に示した薬剤のうちでもとくに注意すべきものは、アドリアシンとハーセプチンです。

アドリアシンは、当院では、術前・術後のAC療法やドースデンスAC療法、あるいは再発後のAC療法としてエンドキサン（一般名：シクロホスファミド）との併用で用いられています。薬の総投与量が増えるほど症状が出現するリスクが高くなるのが特徴で、投与後数年経ってから症状が出ることもあります。アドリアシンの心障害は基本的には元に戻りませんので、心毒性が発生した時点で治療を中止します。

抗HER2薬、とくにハーセプチンも100人に2～4人程度の割合で心機能の低下が認められます。ただ、ハーセプチンによる心機能低下は、投与をやめることにより徐々に回復してきます。心機能が回復すれば、ハーセプチンを再び使用することが可能です。

表2 **注意すべき症状**

こうした薬剤の投与中に、表2のような症状があれば**要注意です**ので**担当医や看護師にご連絡ください。**

- | |
|-----------|
| ・胸がドキドキする |
| ・息苦しい |
| ・からだがむくむ |

心毒性のある化学療法での新機能マネジメントについて

上記のような薬剤の使用開始にあたっては心エコー検査や心電図といった心機能評価が必要で、ハーセプチンなどの抗HER2療法のように治療期間が長い場合には定期的な心エコー検査が必要となります。

抗HER2療法中の心機能低下例では、病態に応じて適宜アンジオテンシン変換酵素(ACE)阻害薬やβ遮断薬が使用されており、循環器医と協同して診療にあたっています。

乳腺外科 稲治英生
内科 中 聡夫